様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４０１４

研究課題名（和文）屏風絵と儀礼に関する空間的研究―東アジア的視点から―

研究課題名（英文）Contextualizing the Screen Paintings:Space and Rituals in East Asia

研究代表者
井戸　美里（IDO, Misato）

東京大学・東洋文化研究所・特任助教

研究者番号：９０７０４５１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本中世の美術を中心に、そこに描かれた図像的な意味とともにそれらが享受された空間について、同時代の歴史、文学、芸能史などを視野に入れた横断的な研究を行った。特に、西欧のタブローとは異なる形態を持つ東アジアに特徴的な屏風絵作品がどのような空間においてどのように享受されていたのか、さらにはどのような機能を担っていたのかを、同時代の文献資料や絵画資料から明らかにすることを目指した。具体的には、物語を絵画化した近世初期の屏風絵作品を始め、中国、朝鮮半島を経由して日本に伝来した「耕織図」の受容、さらに江戸末期から明治初期にかけての日本画について研究を行った。

研究成果の概要（英文）：The late Muromachi period to the early Edo period produced many screen paintings. Given that folding screens are composed and mounted for temporary display, and are architectural structures that divide and ornament space, in this research project, I tried to shed light on the spaces where these paintings were appreciated by re-placing these works, where possible, into their original contexts. This research covered the narrative paintings in the early 17th century, the appreciation and transformation of the “farming and weaving” scenes within the East Asian context, and Japanese-style paintings in the late 19th century.

研究分野：表象文化論・日本美術史

キーワード：屏風　美術　儀礼　受容　芸能　歴史画　物語絵画　東アジア

１．研究開始当初の背景

本研究は、日本中世の美術を中心に、そこに描かれた図像的な意味とともにそれらが享受された空間について、同時代の歴史、文学、芸能史などを視野に入れた横断的な研究を目指している。なかでも屏風、障子、衝立、掛け幅など、西欧のタブローとは異なる形態を持つ、東アジアに特徴的な絵画作品が、どのような空間においてどのように享受されていたのか、さらにはどのような機能を担っていたのかを、同時代の文献資料や絵画資料から探っていく試みである。法会などの宗教的な行事から詩歌や管弦、芸能なども含め、さまざまな儀礼の場において絵画作品がどのように機能していたのかを、東アジアにおいて共有されていたイメージと比較しながら考察することを目標としていた。

２．研究の目的

これまでに調査を進めてきた屏風絵の画題の整理をしつつ、どのような場において、いかなる主題やモティーフの作品が使用されていたのかを当時の文献と照らし合わせながら、検証した。建築に固定されることのない屏風絵のような作品を、歴史を遡りもとの文脈に戻して考えるのは困難を伴う作業である。しかしながら幸いなことに、屏風絵がどのような場で使用されていたかということについては、文献資料とともに絵巻物などの画中画として描かれているものからもある程度推察することができる（赤澤英二「十五世紀の花鳥図屏風―失われた作品を求めて」『日本屏風絵集成』6、1978／武田恒夫「金碧障壁画について」『仏教芸術』59、1965）。

こうした先行研究を参照しながら本研究では平成 24 年までの特別研究員奨励費で行っていた研究（2012 年 4 月から 2013 年 12 月までで辞退）を引き継ぐ形で、国内外にある屏風絵の調査を行ってきた。なかでも、東アジアの文脈のなかで共有される中国起源の主題やモティーフについて、その主題やモティーフの変遷の意味や解釈について明らかにすることを目指した。また、その際に重要な視点は、そうした絵画が用いられたさまざまな儀礼の場に焦点をあてることであるが、中国的かつ儒教的な主題やモティーフは、日本では禅寺から御所、城などの公的な空間に多く見受けられることから、それらがどのように機能していたのかを問うことが重要である。屏風と儀礼の関係については、榊原悟「屏風：儀礼の場の調度―葬送と出産を例に」『講座日本美術史』4、2005／『美の架け橋―異国に遣わされた屏風たち』2002 に詳しい。同時に、日本的な主題を描くやまと絵と中国的な主題を描く唐絵が、どのような儀礼に応じて、どのように描き分けられていたのかを検討することも大きな目的であった（千野香織「江戸城障壁画の下絵」『江戸城障壁画の下絵―大広間・松の廊下から大奥まで』1988／「日本の障壁画にみるジェンダーの構造―前近代における中国文化圏のなかで」『美術史論壇』4、1996）。

３．研究の方法

東アジア的な文脈のなかで美術を概観する場合、美術自体の様式や描かれた主題・モティーフが重要であることは確かであるが、より必要な視点はそれらが置かれた「場」や儀礼との関わりであると思われる。平成 25 年度には、中国に起源を持つ主題やモティーフに基づいて描かれた作品が、朝鮮半島や日本においていかなる受容者のもとでどのように解釈され、どのような儀礼の場と関わっていたのか、ということを検証することを目的としていた。そのため、儒教的な意味合いの強い中国的なモティーフの意味と機能について考察するための一例として、中国起源であることが明らかな「耕織図」を対象として選んだ。実際に中国大陸で制作された作品と朝鮮半島、日本に伝来して制作された作品の図像的な比較分析を行うとともに、同時代の記録を読み解きながら解明していくという作業を行った。また、物語絵画についても同様に、その受容空間について再検討を行うために、当時新興の芸能や文学作品、公家・武家の日記などを参照しながら領域横断的な分析を行った。そして、時代が少し下るが、江戸末期から明治期にかけての日本画については、当時の美術や歴史教育などの枠組みから歴史画の誕生について再考した。

４．研究成果

平成 25 年度は、中国、朝鮮半島に起源を持ち日本で独自の展開を遂げた主題のうち、「耕織図」について、特に朝鮮半島で制作された屏風絵についてソウルの博物館や美術館を中心に調査を行い、2 月にはその成果をまとめて、東洋学研究情報センターシンポジウム「東アジア絵画史の可能性―朝鮮王朝の絵画を起点として」において、「「耕織図」の日本における展開と受容の場をめぐって」と題した報告を行った。また、3 月には、朝鮮半島から日本に渡った屏風絵の調査を国立古宮博物館で行った。

平成 26 年度は、金屏風に焦点を当てて研究を行った。描かれた画題や金屏風が使用された場について、どのような儀礼に際して、どのような画題が選ばれる傾向が多かったのか、ということを同時代資料にあたりながら再検討を行った。金屏風の画題としては《花木》《花鳥》が最も多いことが知られるが、海外への贈答用の金屏風の画題にも先学の指摘の通り物語を描く屏風や、武者絵などが含まれていたことがわかっていることから、特に、物語を描く金屏風の機能について会所など交流の場での享受の可能性を指摘し、European Association for Japanese Studies（於：リュブリャナ大学）において報告を行った（8 月）。この成果は、査読済の雑誌『美

学』の次号に掲載予定である。また米国シアトル美術館に所蔵される屏風絵（8 月）、さらに、韓国古宮博物館に所蔵される宮廷の壁画の調査（3 月）を行った。特に、朝鮮半島の宮中における屏風や障壁画の享受については、今回の調査を通して植民地期における日本人の画家の活動についても研究を進める好機に恵まれた。

以下に、得られた成果についてその内容を順番に記す。

１）「耕織図」の日本における展開と受容

中国に起源を持つ男性による農作業と女性による織物の様子を描く「耕織図」を東アジアの視点から捉えなおすことを目指し、朝鮮半島に現存する作例について調査を行った。本主題については、中国絵画の作品に基づいて、朝鮮半島の宮中において少なからず享受されてきた実態が『朝鮮王朝実録』に記されることからも判明する。朝鮮で制作された「耕織図」の多くのモティーフが中国大陸の明時代の粉本からの引用であることが確認できた一方で、書画の嗜みなど追加的なモティーフも散見され、儒学的、鑑戒的な要素が継承されていることが推察される。他方で、日本で初期の禅寺で受容された「耕織図」は、近世初期には日本の風俗を取り込みつつ、地主の視点に回収されていく傾向も持ち、両者の差異については、享受者の観点から今後も検討を続けていく予定である。

２）物語絵画と芸能の場関わり

17 世紀初め頃に制作された屏風絵のうち、『源氏物語』などの王朝物語、『平家物語』や『曽我物語』などの軍記物語を主題として金泥や金箔を使用し描く作品が多く現存している。なかでも、本研究で着目したのは、『曽我物語』に基づいて絵画化された「曽我物語図屏風」など、当時、流行していた幸若舞曲などの芸能の影響を受けて制作された屏風絵である。同時代の幸若舞曲の受容された空間を文献資料から辿るなかで、特に、当時新興の芸能が行われていた会所の場こそが、こうした屏風絵の受け皿となっていた可能性について指摘した。物語を説明的かつ逐次的に配置して描き込む構図は、当時、受容をしていた武家の寄合の場を荘厳するに相応しい語りの構造となっていたことが推察される。受容の場という視点を通して見えてくる、文学、芸能と絵画が一体となり語る物語構造を個々の作品ごとに分析していくことが今後の課題である。

３）明治期における「歴史画」に関する研究

時代は下り江戸時代末期から明治期にかけて、古代・中世の神話や歴史が再解釈され、いかに表象されてきたのか解明を試みた。発端は、東京大学駒場博物館に所蔵される明治 20 年代に制作された一連の日本画の存在であった。これらの日本画は、東京大学教養学部の前身であった第一高等学校の校長、木下広次の時代に購入されたことがわかっており、当時開校間もない東京美術学校に関わりを持つ日本画家たちによって制作され、しかも、各時代の歴史や風俗に基づく主題を絵画化したものであるという点に特徴を持つ。これらの作品が依拠した図像について調査を進めるなかで明らかとなったことは、これらの一高由来の作品が明治期に入ってから急速に描かれるようになった「歴史画」というジャンルの重要な一角を担っていたということである。文部科学省教育図書館に所蔵される当時の歴史の検定教科書を調査したところ、一高絵画の図像の多くが歴史上の出来事や人物、風俗を描く挿絵と類似していることが判明した。岡倉天心や福地復一とも縁の深い東京美術学校を中心とする日本画家たちによって制作されたこれらの絵画は、明治期における日本史の叙述の一翼を担っていたのであり、当時の一高、ひいては将来を担う若者への歴史・倫理教育を支えていたと考えられる。一高絵画コレクションは、明治国家の倫理観や教育思想を織り込んだ「歴史画」の先駆的な存在であるばかりでなく、西洋に起源を持つ「歴史画」というジャンルが、日本においていかに理解され展開されていったのかということを考える際に重要な糸口を示してくれる。画家たちは、こうした歴史画を生み出す過程において、国家のイデオロギーと画家としての表現の挟間で歴史を叙述するのに最も相応しい表現を模索した。西洋画の技法を駆使しながら、そこに「日本的な」思想性や情趣を見出すこと、それは絵画の問題にとどまらない、日本近代が直面した根本的な課題であったと思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 井戸美里「幸若舞曲の絵画化と受容空間に関する一考察―「曽我物語図屏風」を例として―」『美学』第 247 号、査読有、2015 年（掲載確定。頁数未定）

② 井戸美里 「一高絵画コレクションの概要―一高の教育理念と「歴史画」をめぐって」『BI』第 7 号、査読無、2014 年 2 月、pp.19-34

〔学会発表〕（計 8 件）

① IDO Misato, Creating Gilded Spaces: Kaisho and the Gilded Folding Screens, Invited Lecture at Bowdoin College, Portland (USA), 2015 年 3 月 3 日

② IDO Misato, Pictorializing Kōwaka in Elite Social Spaces: Folding-screen Adaptations of The Tale of the Soga Brothers, The 14th International Conference of European Association for

Japanese Studies, Ljubljana (Slovenia), 2014年8月29日

③IDO Misato, Decorating Space: *Shogon* and the Gilded Folding Screen, l'École Internationale de Printemps, Tokyo National Museum (Tokyo・Taito-ku), 2014年6月10日

④IDO Misato, Art and Rituals: Temporality and Liminality in Japanese Art, Symposium on 'Co-existence in Asian Thought,' University of Yangon (Myanmar), 2014年2月3日

⑤井戸美里「「耕織図」の日本における展開と受容の場をめぐって 」、東洋学研究情報センターシンポジウム「東アジア絵画史の可能性―朝鮮王朝の絵画を起点として」東京大学（東京・文京区)、2014年1月22日

⑥井戸美里「「歴史画」の誕生－明治期における「日本史」の発見と叙述」復旦大学文史研究院、プリンストン大学東アジア学部・東京大学東洋文化研究所合同国際会議 Contested World Histories: Global History in the Eyes of China, Japan, and the U.S., Princeton University, Princeton (USA), 2013年12月16日

⑦ IDO Misato, Visualizing National History in Meiji Period Japan: the Collection from Komaba Museum, University of Tokyo, University of Wisconsin- Madison, Madison (USA), 2013年12月13日

⑧井戸美里「屏風絵にみる〈波〉の風景」(第13 回東京大学東洋文化研究所 公開講座「アジアの流」)、東京大学（東京・文京区)、2013年10月21日

〔図書〕(計０件)

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
井戸　美里（IDO, Misato）
東京大学・東洋文化研究所・特任助教
研究者番号：９０７０４５１０

(2)研究分担者
なし　　（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
なし
（　　）
研究者番号：